

Culib News (クリブニュース)

No.49 2006年7月10日 中京大学図書館発行

ことばの散歩—12—

カレンダーのお話し —3— 紀年法

図書館長 安村 仁志

今年(2006年)は西暦2006年です。「キリスト暦」とも呼ばれる西暦とは、イエス・キリストの生年とされる年を元年とする紀年法です。世界で最も広く使われているこの紀年法はいつ頃生まれたのでしょうか。案外遅く、キリスト誕生後500年以上経った6世紀に、ローマの神学者で教会法学者のディオニュシウス・エクシグウス(Dionysius Exiguus、470年頃?~544年頃)が考えついたものです。そして、実際には10世紀になって使われ始め、一般化したのは15世紀といわれています。

この西暦は、一般的には英語圏を中心に A.D. と表記されていますが、何の略号なのでしょう。実はラテン語の Anno Domini (「主の年に」の意) の略であり、創案者がローマの人間だったからでしょう。一方、「紀元前」という表記の方は、紀元1年の前年から溯っていくものですが、ドニ・プト(Denis Petau、1583-1652、Dionysius Petavius の名でも知られる) というフランスのイエズス会の神学者によって考え出され、18世紀末に一般化したとされています。ラテン語では Ante Christum (A.C.) です。今日一般的には、英語表記の Before Christ (B.C.) が使われています。そうしますと、英語圏を中心に一般化している「紀元〇年」、「紀元前〇年」という表記は、一方がラテン語(A.D./AD)、一方が英語(B.C./BC)となり、変な感じもしますが、それで通用しているのです。ちなみに、フランス語、ドイツ語、ロシア語の「紀元」-「紀元前」を順に挙げておきましょう。〔仏〕Après Jésus-Christ (ap.J-C) - Avant Jésus-Christ (av.J-C)、〔独〕nach Christus (n.Chr.) - vor Christus (v.Chr.)、〔露〕нашей эры(н.э.) - до нашей эры(до н.э.) です。

欧米中心の世界が広がっていく過程でキリスト教以外の宗教をもつ民族にとっては、この紀年表記は抵抗感を抱かせるものとなったようです(少し似た例をあげますと、キリスト教世界の「赤十字」は、イスラム教圏では「赤新月」とされています)。そこで、「共通紀元/共通紀元前」Common Era (C.E.)、Before Common Era (B.C.E.) といった表記も考え出されているといいますが、年号の数え方自体は「キリスト紀元」ですから抜本的解決にはなっていないともいわれます。

「キリスト紀元」がなかなか定着しなかったのは、キリスト教の伝統の中で聖書に基づいて歴史を綴り、年代を刻むという考え方が続いていたからと考えられます。あまり聞きなれませんが、「普遍史(Universal History)」という捉え方で、『旧約聖書』の「創世記」の天地創造から『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」までの記述をもとに「歴史」をたどるというものです。1世紀末に書かれたとされるユダヤ人ヨセフ(35年? -100年)の『ユダヤ古代誌』から、エウセビオス(260年頃 -339年、ギリシ

ア教父)の『年代記』、アウグスティヌス(354-430)の『神の国』などを経て18世紀末のガッテラーの『世界史』にいたるまで受け継がれてきたものでした。バチカンのシステリーナ礼拝堂の壁画は天地創造から最後の審判までが描かれていますが、普遍史を視覚化したものの一例だといえます。そうすると、キリスト誕生まではいったい何年だったのか、言いかえると天地創造は紀元前何年だったのかが大きな問題になります。聖書の記述に従って計算した説は多数あり、キリスト誕生の年は3760年から5873年までさまざまです。詳しくは講談社現代新書の岡崎勝世『聖書 vs 世界史 - キリスト教的歴史観とは何か』をご覧ください。私の研究分野のロシアではビザンティンから東方系のキリスト教を導入した関係で、年代記はビザンティンの〔天地創造暦〕にしたがって年号が記されており、キリスト誕生年が5508年とされていました(したがって、例えば西暦1000年は6508年となる)。

さて、「年年歳歳花相似たり」ということばがあります。毎年花は同じように咲くが、それを見る人は年毎に異なる - 自然は変わらないのに、人の世は変わりやすいということです。なるほどと思うと同時に、近年植物界でも環境の変化のためか、思わぬ異変が起こっているとも聞きます。「年」と「歳」について考えてみたいと思います。年(ねん、とし)という字はイネ(禾)を収穫する人の姿の象形に由来し、穀物成熟の周期から1年が捉えられていたといわれます。また、年は稔と近く、作物の実がねばりをもって成熟するまでの期間と考えられていたようです。「歳」の方は、『漢字源』(学研)によりますと、戌(エツ、刃物の意) + 歩(としのあゆみ)の会意で、手鎌の刃で作物の穂を刈り取るまでの時間の流れを示すといえます。種まきから収穫までの期間を表わし、のち一年の意となったようです。実際、「歳」には、〈穀物の実り〉という意味もあり、「凶歳」(作物不作の年)ということばがあります。さらに、興味深いことに〈木星〉をも意味します。これは、木星がほぼ12年で太陽を一周することから「歳星」と呼ぶ(略して「歳」)ことから来ているのです。次に、「暦」という語に注目してみましょう。「こよみ」と読むのは「日読(かよみ)」に由来します。「暦」という字は、〈いね〉をあらわす「禾」が二つ並びそれを「厂(やね)」で覆うことで、〈順序良く次々と並べる〉という意味となり、それに「日」を加えて〈日を次々と順序良く配列すること〉を表わすようになったのです。古代人のことば感覚におけるロマンを感じざるを得ません。もう一つ、「とし」を表わす「寿」についてみてみましょう。寿を含む語を逆引き辞典で調べてみますと、たくさんの語が出てきます。「寿」は、同じ「とし」でも〈おめでたさ〉が込められているように思われます。鶴寿(鶴のように長生きすること)、賀寿(長寿の祝い)、高寿、仁寿(人徳があって命が長いこと)、聖寿(天子の年齢)、椿寿(ちんじゅ、長命)、無量寿(梵語で無限の寿命をもつもの)、万寿、福寿などはそれにあたり、ほかにも天寿、年寿、人壽など〈人のいのち〉を表わすものもあります。そして、年齢にあわせたなかなかしゃれた表現もたくさんあります。ことばとはすばらしいものだと思わされてしまいます。〈60を過ぎた年齢〉は「華寿」(「華」という字は「十」が六つと「一」から成り、61)、「喜寿」77歳(「喜」の草体が「七」を三つ組み合わせ「七十七」と読ませる)、「傘寿」80歳(「傘」の略字「傘」が「八十」と読める)、「半寿」「盤寿」が81歳(「半」の字を分解すると「八十一」、将棋盤の枡目は9×9の81)、「米寿」88歳、「卒寿」90歳(「卒」の通用異体字「卒」が「九十」と読まれる)、「白寿」99歳(「百」の字から「一」をとれば「白」)、「茶寿」108歳(「茶」の字の草冠の「二十」と下の「八十八」の合計)、「皇寿」111歳(「皇」は「白」と「王」から成り、99プラス12で111)。さらには最近日本百貨店協会が提唱して、なんと「緑寿(ろくじゅ 緑緑寿の略)」が出来ているとのこと(もう何歳かお分かりですよ)。

季節感

野原 敏雄

大学を選択定年で辞め、自らも参加して立ち上げた共同組合の研究機関で、週に2～3日不定期、ボランティア的に働いてほぼ10年、そろそろ自分の不要を感じて、感謝されつつ役職を終えたいまは、「毎日サンデー」の暮らしを始めている。そして今、気ままな暮らしのお陰で急速に強まってきているのは、自然とのふれあいについての関心である。

とりわけ「はまって」いるのは、日本の太陰太陽暦、つまり旧暦である。それは季節の行事と今の暦のズレから抜け出し、暮らしを季節の移ろいにまかせながらのスローライフに変えていくための昔人の知恵の結晶だと思う。

これから「寒のうち」と呼ばれる1年の極寒が始まろうというのに、「新春を祝う」などという年賀の挨拶とはなんてこと、という戸惑いは、定期定時の関係で縛られるうちは仕方ないのだが、気ままな暮らしになれば、すぐにも解消できる。私はこの頃、親しい友人とのみの年賀挨拶だから、出すのは旧暦の正月と決めている。立春前後に来る旧正月ともなれば、不思議と自然の雰囲気は春。気になる他の新暦と季節行事のズレも解消する。かくて新暦の時間に縛られず、暮らしを豊かに充実させてくれる旧暦の「すばらしさ」にほとんど感服する昨今である。新暦がいかにわれわれの季節感を狂わせ歪め、人生の自然感覚を麻痺させてしまっていることか。最近知ってショックを受けたその一例。

梅、桃、桜の標準的な開花の順序は、ウメ、サクラ、モモが正しい。そういえば、確かに桜の満開を過ぎたころ、偶然ある桃農園の横を通ったらまだ満開前だった。そんな経験がありながら梅、桃、桜の開花順序という認識からなかなか抜け出せなかったのは何故か、それがやっと判った。最初は梅、これは間違えようがない。次に桜の開花の前に新暦の「桃の節句」が来る。そこに促成で育てた桃の花が飾られる。こんなくらしが季節感を歪めてしまうのだ。弥生3月3日は新暦では4月も半ばに近い。開花の遅い山桜でももう散り始める季節である。旧暦の標準開花木は、師走の白梅、睦月の紅梅、如月の桜、弥生の桃と見事に季節と合っている。もうひとつ、長年の疑問が解けた例。西行の辞世の歌だ。

願わくば 花の下にて 春死なん その如月の 望月のころ

望月は十五夜の月だから、旧暦2月15日の満月に照らされて霞のごとく咲き誇る桜、この桜も満月も春霞みにつつまれて、寂寞とした絢爛さ、まさにこの世の極楽のような風情にひたりながら死んでいきたいということだろうが、そんなことはありえない。旧暦はひと月おくれとして、新暦の3月15日、染井吉野のなかった当時、開花は遅めの山桜だから、いくらなんでも不可能、「だからこそ西行はまずその起こりえない極美にあこがれを感じつつ辞世を詠んだに違いない」と長らく思ってきた。が、これは旧暦についての無知からだと思った。事実、平成14年の如月の望月は3月28日、同17年は3月24日で、山桜の開花は不可能ではない。このどちらも前年に閏月が入ったため、来年のことを言うと鬼に笑われるかもしれないが、7月が閏月になる今年の翌年だから、平成19年の如月の望月は4月2日となるはずだ。このように、ほぼ3年に1回（正確には19年に7回）旧暦の規則に従って起こるのだから、西行の願望は稀なことですらない。

西行の時代に使われた中国の農暦は、わが旧暦とは少し違うが、大差はない。どちらも、太陽の運行がもたらす季節感、その表現である二十四節気（そのうち12は中気）、つまり太陽暦を基準に、月の運行をそのまま表わす太陰暦を、決まった手法で調整する太陰太陽暦で、季節感に合わぬはずがない、まさにスローライフのための「すぐれもの」なのである。もっとも、旧暦では1年が354日から383～4日の間を変動することになり、国際化したくらしには合わんと苦情が出ることは必定だ。いわんや、1日の長さが日の出、日の入りで決まり、寝苦しい夏の夜は早く、ぬくぬくと布団が恋しい冬の夜はゆっくり流れるウソみたいな時間の流れ方は、デジタル文明に操られるくらしではありえない。しかし、「毎日サンデー」のくらしは、季節の移ろいどおり、自然としての人間の感覚や欲望をそのまま認めてくれるのである。

(元館長、本学名誉教授、文学博士)

新着図書セレクト

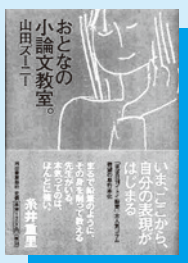
* 3～5月の新着図書の中から、お薦めの本をご紹介します *



『いま知りたい日本国憲法』（東京新聞政治部編・講談社）

請求記号：323.14/To 46, 所蔵：TL

改憲か？護憲か？気になる論点をいまの視点で、一条ごとに分かりやすく解説した「憲法ハンドブック」。



『おとなの小論文教室。』（山田ズーニー著・河出書房新社）

請求記号：816/Y 19, 所蔵：LSC、TL

自分の頭で考え、自分の想いを、自分の言葉で表現したいという人に、「考える」機会と勇気、小さな技術を提供する、まったく新しい読み物です。

請求記号	タイトル・著者・出版社	所蔵
080/H 51/304	『「食」の課外授業』（西江雅之著・平凡社） 文化人類学の視点から見た、驚きに満ちた人間と食の関係。	LSC TL
080/I 95/4-1010	『スローライフ：緩急自在のすすめ』（筑紫哲也著・岩波書店）	LSC
080/Ko 19/1834	『スラスラ書ける！ビジネス文書』（清水義範著・講談社） 「大人の作法」から「プレゼンの裏技」まで、ビジネスを成功させる書き方の極意、教えます。	LSC
146.8/Su 21	『思春期心理臨床のチェックポイント：カウンセラーの「対話」を通して』（菅佐和子編著・創元社）	LSC
159.7/J 52	『30歳へのスピード戦略：ニート・フリーター革命：下流スパイラル脱出ミッション』（人生戦略会議著・WAVE 出版）	LSC
183.2/A 62	『自由訳般若心経』（新井満著・朝日新聞社） 中学一年生にも百歳の老人にもよくわかる感動の自由訳。	TL
210.76/Ka 38	『戦争犯罪と靖国問題』（上坂冬子著・国民會館）	NL
289.1/Sa 66	『宮本常一：旅する民俗学者』（佐野眞一責任編集・河出書房新社） 歩行の民俗学者「旅する巨人」宮本常一の全貌。	LSC
289.3/Si 2	『シーボルト日記：再来日時の幕末見聞記』（シーボルト著；石山禎一、牧幸一訳・八坂書房）	TL
302.1/To 13	『日本人の平均値』（鳥羽賢著・生活情報センター） 生活のあらゆる側面を網羅した「日本人の平均」をまとめたデータ本。	TL

請求記号	タイトル・著者・出版社	所蔵
311.7/B 33	『「アジア的価値」とリベラル・デモクラシー：東洋と西洋の対話』 (ダニエル・A・ベル著；施光恒、蓮見二郎訳・風行社)	LL
336.2/O 61	『時間とムダの科学：仕事の半分は「見せかけ」！：なぜか結果が出る人の24時間』(大前研一ほか著・プレジデント社)	LSC
382.1/A 82	『サザエさんをさがして』(朝日新聞 be 編集部編・朝日新聞社)	LSC
410/F 68	『世にも美しい数学入門』(藤原正彦、小川洋子著・筑摩書房) 数学を食わず嫌いしている全ての人に興味と勇気を与えてくれる画期的一冊。	LSC
464.9/O 74	『飄々楽学：新しい学問はこうして生まれつづける』(大沢文夫著・白日社)	TL
518.8/H 38	『あったかもしれない日本：幻の都市建築史』(橋爪紳也著・紀伊國屋書店) 実現しなかった夢のプロジェクトに「もうひとつの」国のかたちを読む。	TL
519/Ka 14	『環境問題の基本がわかる本：ポケット図解：地球との共生と持続可能な発展』(門脇仁著・秀和システム)	TL
590.49/Ku 55	『暮らしの小ワザ事典：NHK 生活ほっとモーニング』 (日本放送出版協会編・日本放送出版協会)	LSC
675/R 62	『日本をロハスに変える30の方法：BUSINESS LOHAS』 (ローハスクラブ著・講談社)	TL
675.4/Ta 33	『マーケティング・チャンネル研究のフロンティア』 (高橋秀雄著・中京大学企業研究所)	LSC TL
689/O 26	『観光の社会心理学：ひと、こと、もの3つの視点から』 (小口孝司編集・北大路書房)	LSC
723.1/Sa 93	『好太郎と節子：宿縁のふたり』(澤地久枝著・日本放送出版協会) 懸命に生きたふたりの創作の足跡を迫真の筆致で描出する。	LSC
762.346/I 72	『I LOVE モーツァルト』(石田衣良、「熱狂の日」音楽祭著・幻冬舎)	LSC
780.4/N 72	『知っておきたいスポーツ・心・体の大切な話36：1月から12月までの健康・体づくり』(新畑茂充著・黎明書房)	TL
801.7/Sh 18	『翻訳教室』(柴田元幸著・新書館) 東大文学部の翻訳演習を完全収録。	LSC
816/N 92	『なぜ伝わらない、その日本語』(野田尚史著・岩波書店)	TL
904/I 89	『空間・人・移動：文学からの視線』 (伊藤進、郡伸哉、榎正行著・中京大学文化科学研究所)	NL LSC TL
914.6/O 42	『恋愛について、話しました。』(岡本敏子、よしもとばなな著)	LSC
916/O 24	『語り継ごう元戦士たちの証言』(小川健次郎著・リーブル出版)	TL

※所蔵の【NL】は名古屋図書館、【LSC】はライブラリー・サービス・センター
【LL】は法学文献センター、【TL】は豊田図書館です。

なぜ死後に名前を変えるのか

豊田図書館 村上 康廣

「滋唱院美空日和清大姉」は歌手の美空ひばり、「文麗院梶葉浄心大居士」は作家梶山季之の戒名です。格段に長い「東照大権現安国院殿蓮社崇誉道和大居士」は徳川家康、「忠誠院刃空浄剣居士」は忠臣蔵で有名な大石内蔵助の戒名です。言われてみると生前のご当人を彷彿させるものがあります。

休日の散歩コースの道路に面して墓園があります。今まで何気なく通過していたのですが、『戒名』の本を読んでから、俄然、墓石に興味が出てきました。墓地に並んでいる墓を一基ずつ見ていくと、中央の棹石に刻まれた文字は一様ではありません。〇〇家の墓というのが多いのですが、「南無阿弥陀仏」とか、聖書の一節と思しき言葉もあります。中には「ふるさと」という歌の最初のI小節の音符が刻まれているものもあり、故人を偲ぶ遺族の心情が伝わって来ます。

墓の袖の部分に「墓誌」と書かれた石碑があり、そこには様々な「戒名」が刻まれています。「〇〇居士」、「□□大姉」、「〇〇信士」や「□□信女」、中には「◎◎院〇〇居士」のように院号が記されたものもあります。生前の、いわゆる「俗名」を刻んだものもありますが、数は多くありません。この墓園に墓を建てた人の中には仏教徒だけでなく、クリスチャンもいれば無宗教の人もいることでしょう。墓誌に「戒名」を刻んだ墓を建立した人々は、仏教各派に所属している人が多いと思います。実際、「戒名」または「法名」は、所属する寺院の僧侶によってつけられるのが一般的です。しかし、僧侶以外の人が戒名をつけた例もあります。森鷗外は詩人の上田敏や自分の母親にも戒名をつけたそうですし、作家の山田風太郎は「風々院風々風々居士」という戒名を自分でつけたとのことでした。

なぜ、人は死後に名前を変えるのか。このテーマを追求して行けば、様々な問題にぶつかります。「戒名」はどのような歴史的な経過によってつけられるようになったのか。キリスト教では洗礼名（クリスチャンネーム）がありますが、それとこれとはどう違うのか。「院殿号」はどんな場合につけるのか等々です。これらについては著書の中でくわしく説明されています。

「戒名」をつけるときには戒名料を払うことになりますが、院号がつくことによって戒名料はぐっと高くなりますし、大居士と居士、居士と信士の間にも戒名料の格差が存在します。院号は第二次大戦を機に増えはじめ、戦後になって一般化したとの事です。著者はこれを「院号のインフレ化」と表現しています。一方、寺院は檀家の減少等で財政的な問題を抱えており、戒名料は寺院経営にとっては重要な収入源の一つになっているという事情があります。

「戒名」は日本の社会制度にしっかり組み込まれ、その家の格を示すシンボルとしての役割を果たして来ました。また、日本の身分制度とも強く結びついており、被差別部落の人たちに対して、「畜男」とか「僕男」といった戒名がつけられたそうです。

この本を読んで学ぶことが多々ありました。死は誰も避けることができません。やがて来るその時のために、自分の家族には「戒名」についてのきちんとした意思表示をしておこうと思った次第です。

（『戒名：なぜ死後に名前を変えるのか』 島田裕己著）

本学教員著作の寄贈図書

請求記号	タイトル	出版社	著者	所蔵館
333.6/U72	国際貿易の理論と開発政策	中京大学経済学部	経済学部 梅村清英	LSC
366.14/H38	実務労働法 Ⅱ	全国労働基準関係 団体連合会	法科大学院 橋詰洋三	LSC
780.13/N 87	近代スポーツ文化とはなにか	世界思想社	社会学部 西山哲郎	TL
840.2/U93	ドイツ語語彙の史的 研究	同学社	教養部 丑田弘忍	NL LSC TL

*敬称略
ご寄贈ありがとうございました。

つまみ読みのススメ

図書館で何気なく手にとって、本を開いたときの印象が良かったので借りてみる。こういう出会いで読んでみた本が、自分の好きな内容だったときはとても嬉しいです。

『澁澤龍彦との日々』という本との出会いもこのようなものでした。装幀が素敵だったので手に取り、つまみ読みしてみたら好感が持てたので借りました。この本では、澁澤龍彦の妻である龍子さんが、とても素直な飾らないことばで澁澤龍彦との日々を書いています。澁澤作品を読んだことがない私でも十分に楽しめました。妻の目を通した文豪の姿というのも、とても興味深かったです。

もうひとつ、最近出会った『司馬さんは夢の中』も亡き夫との日々を妻が書いているものでした。私は司馬作品も読んだことが無いのですが、大阪にある司馬遼太郎記念館には行ったことがありました。司馬さんが暮らした家の敷地内に建てられた記念館の入口へは、司馬さんの家の横を通っていきます。ちょうど、司馬さんの書斎もガラス越しに見ることができます。その光景は、胸を打つものがありました。それが印象的だったので、奥様が書いた文章を読みたいと思ったのです。以前読んだ『澁澤龍彦との日々』が素敵な内容だったことも影響していると思います。

図書館で気軽にいろいろつまみ読みしてみるのも世界が広がって楽しいのではないのでしょうか。その中で自分にとって印象に残る本と出会えたときの快感を味わってみてください。

(図書館員 N)

図書館カレンダー

7

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

8

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

9

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

10

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

11

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

12

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

通常開館時間

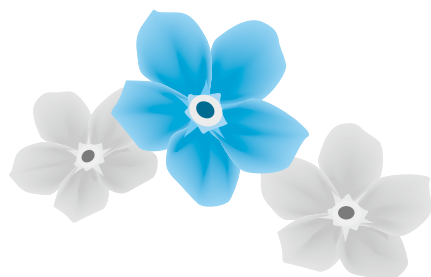
	平日	土曜日
名古屋図書館	9:00～19:00	9:00～12:30
豊田図書館	9:00～20:00	9:00～17:00
ライブラリーサービスセンター	9:00～22:00	9:00～17:00
法学文献センター	9:00～19:00	9:00～12:30

無印は通常開館

■ は休館日

■ の開館時間 (平日 9:00～16:00)

○ の開館時間 (平日 9:00～17:00 土曜日 9:00～12:30)



発行 中京大学図書館

〒466-8666

名古屋市昭和区八事本町101-2

TEL (052)-835-7157

http://www.chukyo-u.ac.jp/tosho/

印刷 株式会社 荒川印刷